

俺が初代魔王なんて間
違っている。

すのどろ Snowdrop

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

無事に総武高に受かった小町。だが、平穩は1ヶ月もしないうちに崩れ去った。そして記憶を取り戻し、人類を裏切る。

名前とか魔法名とかその他もろもろ他から貰ってきます。

葉山アンチです？

そのうち由比ヶ浜も魔王軍に入れます？

目次

1 話：記憶そして転生	1
2 話：虚偽	8
3 話：裏切りは勇者候補達に勇気を与え	18
る	
4 話：再開のダーカライブ城	27
5 話：魔王達の当番決め	5, 5 話：
彼女はカマクラの面影を見る	37
6 話：やはり彼は鬼畜である	6, 5
話：アルテミシアは彼に潰され、彼女は攫	
われる	45
行間？（今までの後書きから + α ）とス	
テータス（現状）	54
7 話：彼女達と彼等は再開する	70
8 話：彼は恐怖の対象となった	8, 5
話：魔法の練習（闇）	78
9 話：何事にも、対価というものは必要で	
ある	83
10 話：敵には力加減を。味方とは会議	
を。	89

1 話：記憶そして転生

「何故だ、比企谷！」

お前に答える言葉なんてない、葉山。

「答えろよ比企谷！」

「…………お前らには関係ない」

1 話：記憶そして転生

「お兄ちゃん、お弁当持ってきたよー」

「おー、すまんなー、小町よ」

1ヶ月前、無事に総武高校に入学した小町は、毎日お弁当を作っている。俺の分も作ってくれるからありがたい。たまに作ってくれないが。

「で、なんでお兄ちゃんはいつもここで食べてるのさ。奉仕部でみんなで食べればいいのに」

「ばっか、お前奉仕部に行ったら罵倒されまくっちゃうでしょ？ここなら風は気持ちいいし戸塚の練習姿見れるし」

「うっわ……」

ひかないで？小町ちゃん。

「つてあれ？これなに？」

そう言つて小町が指したのは何らかの模様。それを辿っていくと、急に光りだす。

「あああああああ！」

「いあああああ！」

光を認識した瞬間、八幡と小町の脳裏に映るのは八幡が手を翳し、黒い魔法を放ち、小町がそれを避ける場面。そして、何か、大切なもの。

思い出せそうで思い出せない。

「……………あ」

2人が目を合わせたその瞬間、全てを思い出した。

初代勇者、小町。

そして、初代魔王、八幡。

つまりはこの2人は敵同士だった。

何故忘れていたのか。本当の敵は目の前に、いつも傍にいたのに。

……お互いに封印魔導撃つたからなんだけど。

話を戻そう。

……戻るのか？

地面に描かれた？出現した？魔法陣は徐々に上昇し、今や3階まで昇っている。

教室からは叫び声や悲鳴やらで阿鼻叫喚。

それだけで済めばまだ良かっただろう。だが、各教室では、ある者は倒れ、ある者は血を吐き、ある者は文字通り弾けた。それは地獄そのものだ。

八幡や小町がいたあの世界に召喚されるのなら、耐性がなかったり、適合しなかったりした者は、召喚魔導の対象になると死やそれに近いものをもたらす。

つまり、この学校ではたくさんの方が死に至っている。その中に八幡と特に仲が良いあの4……3人が居なければいいのだが。

少なくとも戸塚は生きている。

何故分かるかって？目の前にいるからだよ。

やがて、魔法陣は総武高校を覆い尽くし、光に呑まれた。

総武高校があつた場所には何も残らなかつた。

光が収まっていき、辺りを見回す。そこには建物はなく、おそらく地下なのだろう、高い位置に天井が見える。

学校ごと召喚されたと思っていたのだが、学校はなかつた。

そして、俺のように立てていたのは小町だけだった。

俺の姿は制服、ではなく、魔王。

小町は勇者のそれであった。

「小町、どうするんだ？敵としてまた殺し合うか、魔王につくか」

俺が人間の味方をするのではない。絶対にだ。おまけに魔王の姿である。敵と間違えられて終わりだ。

「もちろん、お兄ちゃんについていくよ。お兄ちゃんと戦うなんて嫌だし」

ふと、ポケットになにか硬いものが入っていることに気づく。そのポケットに手を突っ込み引っ張り出す。小町も同じようにしていた。

「これは……」

名前：ハチマン

種族：魔王

Lv. 386

HP：80952

MP：88834

称号：初代魔王 蘇りし魔王 魔帝 月、闇、影の使徒

取得スキル：闇魔導 影魔導 月魔導 死魔導 幻魔導 火魔法 水魔法 氷魔法

樹魔法 雷魔法 光魔法 土魔法 風魔法 召喚魔導 創造魔導 封印魔導 守護
 魔導 使役魔導 並列処理 劍術 テレポート 吸撃 虚偽の申告 索敵 鑑定 本
 物を…… 妹を想う気持ち 本当の友の為に……

俺ってこんななんだ……。

「お兄ちゃん、小町の見せるから見せて〜」

この兄妹はなんて呑気なのだろうか。

そーいや召喚士はどこだよ。

「ほれ」

小町にカードを手渡し、受け取る。

名前：コマチ

種族：人間(?)

Lv. 377

HP：79548

MP：88795

称号：初代勇者 蘇りし勇者 陽、光、聖の使徒

取得スキル：陽魔導 聖魔導 光魔導 星魔導 火魔法 水魔

法 氷魔法 風魔法 雷魔法 土魔法 封印魔導 守護魔導 劍術 テレポート

虚偽の申告 索敵 鑑定 兄の為に……

なんか似てるわ。てか人間(?)とか。小町が可哀想だわ。

「ほえー、お兄ちゃん強いね」

カードを返す。

「そういう小町もな。さて、そろそろ起こしにかかるか。虚偽使つとけよ」

「そだね。私雪乃さん達起こしてくる」

そう言って駆け出した。思ったけど魔王ルックで起こしたらヤバイんじゃないか？

「見た目だけでも誤魔化しておくか。虚偽の申告」

……………葉山グループ起こしてあとは任せるか。

「水よ……」

水に願かけ、呼び出す。その水を葉山の頭にかけた。

起きるまで、何度も。風邪? 知らん。

「ん…、ここは……」

「異世界だ。他の奴らを起こすのは頼んだ」

「っ!? わかった。ヒキタニ君は……」

「俺はここの召喚士を探す。たぶんそろそろ来るだろうが」

「そうか。ならそつちは任せた」

まあ、このあと裏切るんだけどね。

次に会うのはいつになることやら。

……、あいつらはどうしようか。あいつらを連れてくわけにはいかんし。

「お目覚めですか、勇者様方」

来たか。とりあえずアイツに案内させてからここを出るか。

2話：虚偽

2話：虚偽

「お目覚めですか、勇者様方」

ようやく召喚士様のお出ましか。

銀色の長い髪を縛らずに自然な感じで下げ、蒼い瞳。全体的にすらつとした体型、所謂美女、というものだろう。

周りの男はゆっくり歩いてきたその人に見蕩れていた。一部の女子も見蕩れていた。しかし、何故か俺が見ると灰を被っているように濁って見える。特に興味もわからないからいいが。

「私の名はアルテミスア。この国の王妃です」

誰もが喋らず、言われたこと、今の状況にボケっとしている。

「葉山、お前のターンだ」

俺は近くにいた葉山に声をかけ、こちらに戻ってこさせた。もちろん、俺がやるという手もあったが、俺じやなんの影響も与えないだろう。

「あ、ああ、すまない、比企谷」

謝ってる暇あつたらさっさと見えよ。

「アルテムシア様、ここはどこなのでしようか」

「様はいりませんよ。この世界はネピアといえます。そしてこの国はメモリアです。現在、この国は、世界は、魔王の侵攻を受けています。しかし、その侵攻は止まる気配を見せず、それどころかより過激化してきています。そこで、異世界召喚をさせていただきます」

「元の世界には戻れますか？」

「ええ、戻れます。魔王の討伐、封印をしていただいた時には国民総出で魔力を練り、元の世界に戻る魔法を使います」

「嘘つくなよ。この世界には召喚魔導や封印魔導はあつても帰還魔導なんてないぞ。あつちで召喚魔導使わない限りはな。」

まあ、俺はこの世界から離れたくないが。魔王でいた時は楽しかったし。

「ふざけんなよ！こつちでの安全保障できんのかよ！」

「なんで私がこんなめに遭わなくちゃいけないの!？」

まあこれはうん、仕方ないよな。異世界転生最初の難関的な感じだしな。

「大丈夫です。外に出るのは危険ですが、レベルが25になれば安全ですから」

何言ってるの？魔王倒すまでにレベルは最低でも350まで上げなきゃいけないん

だから甘ったるいこと言ってるんじゃないやねえよ。いや地道にやっつけてけば関係ないけど。それに俺にはもつと関係ないけど。レベル350まで最低5、6年かかるし。

「そのレベルまでの保証はできんのかよ！」

「ええ、大丈夫です。我らが命に変えてでもお守りしましょう」

レベル25までだったら1ヶ月頑張れば終わるか。

まあ、数年経つとそれまでに俺、レベル400になってるかもだけど。

はい、レベル350以上はそんな簡単にレベル上がるほどの世界は甘くないです。だって、同じレベルのやつ皆無だもん。

「皆！頑張つて魔王を倒して、元の世界へ帰ろう！そのためにも俺が引っ張っていく！」
そこらじゅうから声援が上がる。だが、お前にできんのか？葉山。まあ、その努力も無駄になるだろうが。

お前に殺されるくらいなら自殺した方がマシな気がするよ、俺。

「では皆様、こちらへどうぞ。城へ案内します」

その城壊してやろうかな。

「お兄ちゃん、どうするの？」

「国王殺してから出るか」

「殺すんだ……」

材木座や戸塚、川…サキサキ、雪ノ下や由比ヶ浜、一色はどうしようか。それなりに強くないと元ダーカライブでは生きていけないしなあ。

「なんなら城も壊したい」

「お兄ちゃん……」

「こちらがメモリア国王、ユリアス様の王室にございます」

国王……殺したい！

てかこつちの世界に来てから殺人欲がでているのだが……どうしようか。

「お兄ちゃんお兄ちゃん、なんか胡散臭いよ」

「おっさんくさい?」

由比ヶ浜、口あけないで?

「おっさんくさいくはねえよ……」

「先輩……」

一色はシユンとした表情で袖を掴んできた。やはりこの世界から帰れるのか不安があるのだろう。いや、この世界自体にも不安はあるだろう。教室でも弾けたやついたっほいしな。全校生徒の1/5くらいになつてゐるし。

……、コイツは連れてってやるか。

「ようこそメモリア王国へ。我はユリアス。早速で悪いとは思うのだが、こちらの水晶に1人1人手を翳していただきたい」

身分証明書にもなるカード。あれは誤魔化しきれないな。

「……小町、アレは誤魔化せないぞ。どうする?」

「やっちゃおう?」

「ま、俺は魔王だからな。最後の方にやるか」

わー! きゃー! ふいー!

歓声に口笛。うっさい。誰だよカード作ったやつ。

「えー、名前はハヤマハヤト、Lv. 8、HP：1510、MP：856、種族：異世界人で称号は初代勇者に近し者」

んだよ、葉山か。初代勇者に近し者、ねえ。小町を超えられるかね?

「取得スキル：火、水、氷、雷、土、光魔法、聖魔法、封印魔法、支援魔法、剣術、索敵。ふむ……、頑張りたまえ」

「ハイッ!」

それから数十人がカードを作り、俺の番の直前。

その前に俺の関係者の紹介を。

名前：雪ノ下雪乃

種族：異世界人（以下略）

L v. 5

HP：580

MP：1720

称号：氷の使徒

取得スキル：水、雷、土、光魔法、氷、聖魔導、封印魔導、使役魔術、料理、裁縫、乗馬、本物を……

名前：由比ヶ浜結衣

L v. 3

HP：1200

MP：700

称号：なし

取得スキル：火、雷、光魔法、回復魔法、支援魔法、封印魔導、索敵、料理……、本物を……

名前：一色いろは

種族：異世界人（?）

L v. 6

HP：1049

MP：800

称号：なし

取得スキル：火、水、雷魔法、光、闇魔術、封印魔導、索敵、使役魔法（♂、男のみ）、
吸撃、料理、本物を……

名前：戸塚彩加

Lv. 4

HP：795

MP：763

称号：天使

取得スキル：光魔法、治癒魔導、支援魔法、封印魔導、索敵、本当の友のために……
名前：材木座義輝

Lv. 9

HP：1402

MP：520

称号：自称劍豪將軍

取得スキル：闇魔術、劍術、封印魔導、本当の友の為に……

名前：川崎沙希

L v. 8

HP：1304

MP：725

称号：なし

取得スキル：拳術、付与魔法、封印魔導、火魔法、索敵、料理、裁縫

名前：三浦優美子

L v. 8

HP：950

MP：706

称号：おかん、女王

取得スキル：水、雷、土、光魔法、火魔導、封印魔導、劍術、使役

名前：海老名姫菜

種族：異世界人(?)

L v. 7

HP：730

MP：1031

称号：腐女子

取得スキル：腐魔術、封印魔導、限定テレポート

名前：平塚静

L v. 9

HP：1210

MP：604

称号：独神、教師

取得スキル：拳術、支援魔法（自身のみ）、火魔法、付与魔法、封印魔導

………以下略。

「次の者」

ついに俺の番か。さて、と。

水晶の前に立ち、水晶の後ろに座っている国王を見る。ガン見というやつだ。もちろん、失礼な行為である。

「貴様！」

国王の近くにいた騎士が剣を抜き、俺に斬りかかる。

「いやああああ！」「比企谷君！」「比企谷！」

「きやああああ！」「八幡！」

鑑定。相手に視線を合わせ、そのカードを読み取る。

L V. 89。論外だな。

俺はゆっくり手を伸ばし、振り下ろされる剣を掴む。

『はっ。』

誰もがそう思っただろう。特に目の前のこの男は。

「解除」

虚偽の申告を解除した。つまりは魔王という姿を晒すということ。肩甲骨あたりから悪魔のような翼、頭からは大きな角が生え、目は紅く染まった。服装もいかにも魔王なものに変わる。

まわりの生徒や先生からはざわめき、まわりの騎士達は剣を抜き、魔法の詠唱をする声が届く。

「小町〜！」

「あいあいさ〜！解除♪」

小町の姿は勇者のそれに変わる。まわりのざわめきは更に大きくなった。

俺は国王に手を翳し、最悪の魔法を唱えた。

「汝に死の宣告を！」

さあ、蹂躪の始まりだ。

3話：裏切りは勇者候補達に勇気を与える

3話：裏切りは勇者候補達に勇気を与える。そして彼女達は……

「汝に死の宣告を！」

さあ、蹂躪の始まりだ。

「魔王め！我が王に非道なことを！今すぐ殺してやる！」

「その勇者と勇者候補！ボサツとしてないで殺れ！」

はっ。小町はともかく勇者候補のレベル10もいかないやつらに俺は殺されはしない。というよりこっちにきて一時間ちよつとで武器も持たされない奴らに殺せとか命令するなよ。鬼畜にも程があるぞ。人間としてどうなの？

「風魔導を取得しました」

脳内に機械音声でテキストが流れ込んでくる。使い方もバツチリ♪
キモいわ。やめとこ。てかいきなり風魔導の取得かよ。ビビったわ。
まあでも。

「風は吹き荒れ、護るべき者を護り、中立を抑え、殺るべき者を殺る」
遠慮なく使うんだけどね！

護るべき対象。それはもちろん奉仕部と一色と戸塚と川崎姉弟と材木座である。あいつらは、あいつらだけはこの世界でも守り抜きたかった。もちろん過去形である。

この姿を晒した以上、着いてくる者は小町だけだろう。あとは気になるのは一色と海老名さんだな。(?)なんて付いてるのアイツだけだし。

王室全域に暴風が吹き荒れ、騎士や王と総武高校メンバーと奉仕部関係を3分する。そして風は騎士や王に襲いかかる。その風は鎧を削り、服を破き、肉を裂く。そして血が咲き、舞い上がる。後ろでは叫び声が響き渡っている。こんな状況じゃあ当たり前だ。

「な、なんでも言う事聞くから許せ！」

王が何か叫んでいるが俺には関係ない。何故なら現魔王ではなく、初代魔王だからだ。それに俺や小町、そして奉仕部や大事な人達を巻き込んだんだ。これくらいさせてもらわないと。あと召喚される時に死んだ奴らの敵討ち(笑)

「許すも何もねえよ。俺は初代魔王だ。今の魔王とは関係ない」

「小町は初代勇者だけとお兄ちゃんのが大切だから♪」

小町、お兄ちゃんは嬉しいよ。そんなこと言ってくれるなんて。

「小町的にポイント高いっ♪」

その言葉で大暴落……。

「裏切り者め……」

「ほう、誰が裏切り者だと？」

俺は小町の背中にあつた剣を引き抜き、瞬時に王との距離を詰め、王の首筋に剣を突き付ける。

「どう考えてもあい……」

その言葉が最後まで続くことはなかった。言葉のかわりに王の首が飛んだ。その首は総武高校メンバー側まで飛び、それは生徒の牽制代わりとなった。阿鼻叫喚の嵐で氣付いている者は零に等しいだろうが。

「お兄ちゃんお兄ちゃん、これ以上殺したら勇者候補達が戦えなくなるよ？」

「おお、そうだな。……そして風は止み、安寧が訪れる」

瞬間、ピタリと風は止み、叫び声も止んだ。全員がこちらをみている。騎士や王妃は腰を抜かし、呆然とこちらを眺めているだけだ。

「小町、剣返すわ」

「お兄ちゃん、血、付いてないよね？」

「俺が血のついた物を持ち主にそのまま返すと思うか？」

剣は拭かなくても血は付いていなかった。

「まあ、その剣を小町が持つてたら大変なことになるからここに置いてくことをオスス

メする」

「了解であります！」

ビシツと敬礼し、肩にかけてあつた鞆を外し、玉座に放り投げた。

「投げんな」

「あたつ」

優しいチョップをかますと小町はむう、と唸つて俺をみる。

さて、これからどうするか。とりあえず奉仕部関係のところに向かう。さて、拒絶するのか、受け入れるのか。修学旅行じゃ辛かった拒絶。今じゃ楽しみになっている。狂つてる。でも本能が暴れたいと叫んでいる。

「ひ、比企谷君……」

「ヒツキー……」

奉仕部の二人の目には明らかな拒絶の色が見える。

まあイツらからしたら罪もない人を殺したんだ。当たり前前の反応だろう。しかし……

「八幡！なんだお主！かつこいいではないか！」

ドタドタと駆け寄ってきたのは材木座。コイツは中二病だしな。分かるが、それは内心に留めておけよ……。

「我也連れてけ。我は八幡、お主についていくと誓ったのだ。あのころから、ずっと」
かっこいいこと言うじゃないですかやだー。ていうか近い、近いよ材木座。顔がド
アップしててウザイ。

「……そ、そうか」

「お、お兄ちゃんについていくる友達がいるなんて……」

酷くない？小町ちゃん。

「裏切り者め！光よ！」「風よ！切り裂け！」

「水よ！」「火よ！焼け！」「氷よ、貫け！」

へえ。刃向かう度胸のある奴らも総武高校にはいたんだな。

「防壁構築」

半透明なドーム型の防壁が俺らのまわりに展開される。

「さて、話をしようか」

「罪もない人を殺す人に話すことなんてないわ」

「ゆきのんの言う通りだよ！なんで王様殺したの!？」

なんで、か。知らないから言えることなんだろうな。部室に居れば教室や廊下の様子
なんてわからないだろうし。

「テレポーテーション起動」

雪ノ下と由比ヶ浜の足元に魔法陣が展開され、それは即座に上昇し、二人を覆う。次の瞬間には三浦や葉山達のところに転移していた。

「僕は八幡に着いてくよ！親友だもん！」

1歩、踏み出したのは戸塚だった。もちろん、拒むわけが無い。

「せんばい……」

次は一色か。てか外野がうるさい。

「どうした？」

「私、人じゃないみたいです……」

「俺は初代魔王だ。人じゃなくても誇りに思えよ」

おい葉山、その玉座においてきた宝剣取り出すのやめろ？さすがにその剣は防壁じゃ

あ防御できねえから。

「……なので、私もせんばいに着いていきますねっ♪」

涙目で俺を見つめながらそんなことを言う。やっぱり一色は……

「……あざとい」

「あざとくないですうー！」

ぶくう、と頬を膨らませて抗議する。どこからどうみてもあざといです。

「で、川崎はどうするんだ？今ならまだ引き返せる」

「あたしは……」

「俺はお兄さんに着いていくっす！」

なんでコイツに好かれてるんだろうか……。俺なんかしたっけ？

「お兄さんは俺の憧れっす！だからどこまでも着いてくっす！」

「ふっ、そうか。小町はやらんがな」

「お兄ちゃんシスコン発言やめよ？」

ウイツス。

「大志が着いてくならあたしも……」

「俺がやろうとしていていることにそんなブラコン発言だけで着いてくるなら要らない」

歯軋りする音が聞こえる。そして大志はすつと息を吸った。おそらく批難しようとしていいるのだろう。……大志は強いな。毒虫とはもう言えないな。

「……姉ちゃんは俺が守るっす！だから姉ちゃんも連れてってください！」

おおう、ここまで強いとはな。この見た目の奴相手にここまで言えるなら……。

「はあああああ！」

葉山が宝剣を抜き、駆けながらそれを一気に振り下ろす。ドーム型の防壁はいとも簡単に破られ、俺に剣が振り下ろされる。

「創造、刀」

俺は魔力から作り出した刀を右手に、宝剣を弾き飛ばした。

「何故だ、比企谷！」

お前に答える言葉なんてない、葉山。

「答えるよ比企谷！」

「……お前らには関係ない」

とだけ言っておこう。

「なんで協力できないんだ……！」

「そうだな、俺はお前が嫌いだから、と言っておこう。風は対象を元ある場所へ運ぶ」

葉山が元の位置にまで一気に戻るほどの強さの風を起こし、再び防壁をはる。

「雪ノ下、俺からのプレゼントだ。召喚、ラーブ」

猫型魔獣を最初の敵として贈ろう。上手く手懐けてくれることを祈ろう。あのラー

ブのレベル216だけだ。

「お兄ちゃん、ダーカライブのどこに飛ぶの？」

「もちろん俺らが戦った場所。テレポーテーション起動」

「待て！比企谷！」

「転移、ダーカライブ城封印の間」

じゃあな、雪ノ下、由比ヶ浜、葉山。お前らが俺の前に立ちほだかることを楽しみに

してよう。

……、その前に魔族は人間を攻撃しなくなるかもしれないが。
光が俺らを包み込んだ。

ラーブが手懐けられるのか、殺されるのか。楽しみだな。

……海老名さん攫ってくれば良かったかな。

4話：再開のダーカライブ城

4話：再開のダーカライブ城

「転移、ダーカライブ城封印の間」

白い光に包まれる中、頭に機械音声が響いた。

「監視スキルを取得しました」

えっ、監視スキルって何？てかレポート中にスキル取得すんなよ……。

使い方も頭に響いてきたけども。

光が薄まる感覚に、目を開けると、そこには……

「……………」

「お兄ちゃんお兄ちゃん、どこが封印の間？」

視界いっぱいとはいかないまでも、辺り一面に広がるのは色鮮やかな花畑。まるでどこぞのアホの子の頭の中のようなのだ。

一色や戸塚は歓声をあげ、花に近づき、大志や川崎姉、材木座は呆然としている。その中俺と小町は記憶を掘り返していた。

「うん、おかしい」

「せんぱい、どうかしたんですか？」

「ああ、俺と小町が戦ってた時はこんな花畑は無かったんだよ」

「それに戦ってる時に部屋中穴だらけになりましたし」

「そういえば、せんぱいと小町ちゃんの関係ってなんなんですか？急に魔王っぽくなったり勇者っぽくなったりしてましたけど」

「歩きながら話すわ。あつちに扉あるみたいだし。おい、ボサツとしてないでいくぞ」

いきなり歩き始める俺に慌ててついてくる一同。小町と一色は俺に並び、一色はキラキラとした目で俺をみてる。後ろからも視線が集まっている。

はあ、と一つため息をついて話し始めた。

「あー、めんどくさいから簡単に言うよ、俺と小町はこの世界の初代魔王と初代勇者なんだよ」

「やっぱり八幡はすごいや」

「お兄さん！俺に魔法教えてくださいっす！」

「八幡！剣術教えてくれてもいいのだぞ？」

「せんぱい、隠してたんですか？」

「はあ……」

1度に言うなよ……。てか川崎姉よ、ため息つくときれい逃げろ。俺に着いてきて

る時点でかなりの幸せが逃げてるけどな。

「気が向いたらな。それで、小町と俺で封印魔導撃つて相打ちになったから」

「地球で兄妹になつて転生したのです」

この時の小町の顔が○(・ω・+o) ドヤア……！って感じになつてて可愛かったです。

「兄妹じゃなかったら大変なことになつてたかもな」

色々説明していると、なんの罨もなく扉に辿り着いた。逆に怖いわ。この扉開けたらなんかありそうで。

「全員少し下がってろ。あと小町、防壁はつとけ」

俺はそつと、ゆっくり扉に近づいていくと……

〃忍び足スキルを取得しました〃

急に頭に響いた機械音声についこけてしまった。頭から扉に突っ込み、重たそうな扉はいとも簡単に開いた。

そして……

「私の庭にどうやって入ったのかな？」

どこかで聞き覚えのある声に顔を上げる。

「……………何してんすか、雪ノ下さん」

や、ほんと何してんのこんなところで。てか悪魔の翼に角て……。何？ほんとに魔王だったの？

「え？比企谷君、なの？」

「ええ。比企谷です。小町、防壁解除していいぞ」

「りよーかーい」

「で、雪ノ下さんはここで何を？」

首を傾げ、唇に指を当てながらえーとー、と呟く。

仕草があざとい。あと魔王ルックだから怖い。

「魔王やつてます♪」

ええ……。マジで魔王だったのかよ……。てか雪ノ下さんいるなら城廻先輩も……？

「お久しぶりです陽乃さん！初代勇者の小町です！」

「ええっ!?初代勇者だったの!?!」

「そーですよー。ちなみにお兄ちゃんは初代魔王でした♪」

「えええっ!?!」

城廻先輩について質問しようとしたら小町が先に話してた。うん、まあいいけど。珍しく雪ノ下さんの驚いた表情みれたし。

俺は小町が元いた場所まで下がり、暇つぶしをすることにした。うっわ、失礼な言い方。まあ、いつも失礼なんだが。

「あー、お前らレベルが150になるまでは1人で行動すんなよ？俺か小町を連れて行動しろよ？現魔王が雪ノ下さんだから大丈夫だとは思うけど。この城周りはレベル高いからな」

「じゃあ私せんぱいと同じ部屋が「却下」なんですかー！」

常識考えて？異世界だけど常識考えて？

「男女は別々だろう。そもそもこの城なら1人1部屋は余裕にあると思うんだが」

「八幡、みんなレベル低いから不安なんだよ。だからなんとかならないかな？」

「よし任せろ」

戸塚の上目遣いには抗えん。

……数名引いてる気がするけどまあいいか。

「雪ノ下さん、この庭ください」

「やだよ」

即答。ま、当たり前だろう。だから挑発してみよう。

「じゃあ俺が12代目魔王になりますね？」

「いいの？私、レベル333だよ？」

「俺のレベル、386なんですけど」

戸塚達が息を呑み、雪ノ下さんは絶句した。

「で、一部だけでも貰えませんかね？」

「し、仕方ないな、右半分だけだよ？」

「おお、なんといい好条件。なら早速……」

俺は両手を掲げ、目を瞑った。イメージするのは元住んでた俺と小町の家。つまりは比企谷家である。さすがにそのままでは狭すぎるので少し大きくした比企谷家をイメージする。

「創造神よ、我が命ずままに全てを創造せよ」

瞬間、この花畑の右手前に魔法陣が展開され、毎分4mの速度で魔法陣が上昇していく。

………魔力足りるかな……。不安なんだが。

side change

お兄ちゃんがいきなり陽乃さんを（半分）脅してこの庭の右半分を奪つ……。譲り受けた。小町は戸塚さんや沙希さん達の話を聞いていなかったからよくわからないけど、何か頼んだんだと思う。お兄ちゃんは自主的に動こうとしないからねえ。たぶん。少なくとも味方のはずの陽乃さんと敵対はしないはずだから頼んだんだと思う。

陽乃さんから許可を貰うと、お兄ちゃんが両手を翳して中二病発言を شدした。魔導はイメージ通りに言葉を出さなきゃいけないんだけど、お兄ちゃんはチートみたいになんでもかんでもやるからもう無詠唱でいいんじゃないかと思う。そんなスキルは滅多にでないらしいけど。

「あ」

つい小町は声を出してしまった。なぜなら、今お兄ちゃんが創っているのは比企谷家だったからだ。

ていうか創造魔導って魔力消費量がかなり多かったと思うんだけど、家なんて創って魔力足りるのかな？

あ、星魔導なら魔力回復できるじゃーん。

「星に祈りを……全ては兄の為に」

みんながギョツとするなか、詠唱を終えると、お兄ちゃんに光が降り注ぎ、魔力が回復していく。していつてるはず。その証拠に、お兄ちゃんの魔法陣がさつきより速く回転している。

「こ、小町ちゃん、せんぱいは何を……」

「お兄ちゃんは比企谷家を再現しています。中も比企谷家なら安心して過ごせると考えたんだと思いますよ」

「やつぱり比企谷君（比企谷）はシスコンだね」

なんで？いや、シスコンなのはあってるけど。

今はみんなのた……め……？

……………お兄ちゃんだし小町のためというのが否定できない……。

「ま、まあ、お兄ちゃんですのので」

小町もちよつと苦笑い。

逆にいろはさんはちよつとキラキラしてる。

お兄ちゃんもモテるようになったんだねえ。小町としては複雑な気分だよ……。あれ？この世界でお兄ちゃんと小町って血は繋がってるの？

ニヤリ

小町もお兄ちゃんのお嫁さん候補に参戦かな？

楽しみだなあ。ふふつ

side change

小町に星魔導を使って貰って貰ってから俺の魔力量が一気にフル回復した。星魔導強すぎない？まあ、それはおいといて。魔力量が全快してから、魔法陣の上昇速度が毎分6mになった。いや、もうすぐ完成だったから上昇速度が上がってもあんまり嬉しくないんだけど。魔力が尽きかけてたから中途半端に家が創られても困るから星魔導は有難いん

だけど。それはそうと、

「ふう、疲れた」

「お兄ちゃんお疲れ様ー」

小町が労いの言葉をかけてくれると精神的にも回復していく。はずなのに今はそんなに回復しない。何故だろうか。

……寝るか。

「おう、ありがとな、小町。俺は寝る」

「ちよちよちよつと待って比企谷君！」

寝ようとした時点で雪ノ下さんに引き止められた。解せぬ。

「なんですか？」

「家の案内してよ！」

……小町に言ってくださいよ、それ…。

「小町、あそこでボケつとしてる奴らとキラキラしてるのも引き連れて案内してくれ。

俺と小町の部屋以外はほとんど客室だから」

「お兄ちゃん、それ小町的にポイント低い」

ええ……。案内なんてめんどくさくてしたくないよ……。

てことで案内はまた次回。

(お兄ちゃん、メタ発言はやめようか)

小町が直接脳内に……!?

“以心伝心を取得しました”

ああ、意識しないとめんどくさいやつ……。

(心が通じ合う♪小町的にポイントたっかい♪)

八幡的にポイント低いよ……。

5話・魔王達の当番決め の面影を見る

5, 5話・彼女はカマクラ

5話：魔王達の当番決め

はい、カット。

(メタい、メタいよお兄ちゃん)

なんだかんだで一悶着あったものの、めぐり先輩を呼んでから俺と小町が案内して、今はリビングで当番決めをしている。料理組は小町、川……サキサキ、陽乃さん、めぐり先輩、一色の5人で交代交代ということは決まったのだが……。

「せんぱーい、私は（先輩の）部屋の掃除がいいです！」

筒抜けなんだよなあ。てことはあいつも以心伝心取得したのか。

「却下。自分の部屋は自分で掃除する」

「えー、なんでですかー」

それが普通だからです。

「リビングは4日に1度の掃除として……」

「お兄ちゃん、2日に1回の方がいいと思うよ？結構使うし」

「じゃあそうしよう。順番は1〜9のくじを引いて決めるか。創造神よ、我が命に従い全てを創造せよ」

新しい紙と番号が書かれた割り箸が創られた。

創造魔導便利過ぎない？魔力消費量デカいけど。

「時計回りでいいか。じゃ、小町から」

「3だね」

.....

結果、

1, 川崎沙希

2, 戸塚彩加

3, 比企谷小町

4, 材木座義輝

待て、材木座は掃除できるのか？

(さあ?)

(ちよつと怖いですね)

酷い言われよう。まあいいや。

5, 城廻めぐり

6, 比企谷八幡

7, 一色いろは

8, 毒む……川崎大志

9, 11代目魔王こと雪ノ下陽乃

(なんで魔王つて言ったの? お兄ちゃん)

なんとなくだよ。

「次、魔力補充」

「それは私とめぐりと比企谷君と小町ちゃんて回した方が良くない?」

「そうですね、まだレベル低いですし」

「俺、小町、陽乃さん、めぐり先輩の順でいいですかね?」

俺で一気にやればみんな少なくて済むしな。

(小町の的にポイント高いよ! お兄ちゃん!)

ポイント制度止めない? ていうかなんのためにあるの?

(8万ポイント溜めると小町を上げます)

わーうれしー。で、今何ポイント?

(128671ポイント)

「上限8万ポイントじゃねえのかよ!」

つい大声でツツコミを入れてしまった。

全員ビクつとしてるし一部はガチ引きしてる。

「ど、どうしたの、八幡……」

と、戸塚にまで引かれた……。もう無理生きていけない。

（小町がいるよ！いつでもおいで、慰めて上げる！）

（私も慰めて上げますよー）

（お姉さんが慰めて上げよう）

おい待て何故陽乃さんまで入ってきている。

（八幡、引いてないから安心して？）

k t k r もう生きていけるもはや永遠の命を創れるまである。

「で、次は？」

なんかあつたつけ？他。

「洗濯ですかねー？」

「あと訓練だね」

「洗濯は料理組お願いします。訓練は毎日3時間基本的に全員参加で」

休みも入れた方がいいか。うーん、

（魔王城自体にカレンダー普及する？）

じゃあ創造魔導で創るので普及を陽乃さんをお願いします。

「創造神よ、我が命に従い全てを創造せよ」

テーブルの上には比企谷家のカレンダーを見ながらカレンダーを創造する。

「毎週日曜は訓練お休みで」

「魔王城にはどう言えばいいかな？」

会議？

（放送？）

（手紙？）

（んー、次の定例会議でいつか。明後日だし）

「次」

「ない」

「待って、魔王城への普及はどうするの？」

「それもう決まった」

「「いつ!?!」」

川崎姉弟とめぐり先輩の声が被った。

……何故材木座は驚かない。

（私も以心伝心を取得した）

なんでもありなのかな、この世界……。

(異世界だから)

4, 5話：彼女はカマクラの面影を見る。

猫……。

『ミヤウウウウ』

近づいていく私に、比企谷君が召喚した猫が威嚇する。

後ろでみんなが私に叫んでいるようだが関係ない。

私が拒絶してしまったとはいえ、比企谷君が残した猫。

『雪ノ下、俺からのプレゼントだ。召喚、ラーブ』

もしかしたらあの王様は何かしていたのかもしれない。だから比企谷君が殺したのかもかもしれない。私達に本物を求めていた。きっと、そういうことなのだろう。私が信じてあげれば、もつといい結果になったのかもしれない。修学旅行の時も何か理由があったのかもしれない。

だからこの猫にも何かあるのかもしれない。もう間違えない。間違えられない。

「おいで」

ラーブの前にしゃがみこんで顎の下をくすぐる。

後ろがうるさい。今私はこの子と話しているのだから少しは集中させて欲しい。

『ゴロゴロゴロ』

この子の言葉は分からないけれど、たぶん喜んでいると思う。

「はあああああ！」

「待って！葉山君！」

私はラーブに向って剣を振り下ろす葉山君を止めようとした。しかし、遅かった。私がこの子に集中していたから。もう少し後ろに気を付ければこの子は……。

『ミヤウー！』

ラーブは振り下ろされた剣をそこそこ長い爪で受け止めた。

「うわっ」

葉山君を弾き飛ばした。

そしてラーブは私に近づいて……。

私が入るように魔法陣を展開した。

「な、何を……う？」

そのラーブに、私は比企谷家のカマクラの面影をみた。

次の瞬間、私は白い光に覆われ、機械音声で

“以心伝心を取得しました”

と言われた。

どういふしかけか分からないけれど、私はその以心伝心の使い方を理解した。

比企谷君を想う気持ち……？

それがこの以心伝心に繋がるのだろうか。

私はそんな事を考えながら、白い光に身を任せた。

「ゆきのん！」「雪乃ちゃん！」

もう2人と会うことはないのかしらね。葉山君はどうでもいいのだけれど、由比ヶ浜さんと会えなくなるのは寂しいかもしれないわね。

6話・やはり彼は鬼畜である
6, 5話・アルテムシア
は彼に潰され、彼女は攫われる

6話：やはり彼は鬼畜である

「第1回！小町と鬼いちちゃんによる特殊訓練！」

「「特殊ってなに!?」」

えーと、俺が鞭やらなんやら持って遅れる奴をピシバシと叩いてく。

「鬼いちちゃん曰く、俺が鞭やらなんやら持って遅れる奴をピシバシと叩いてく。そうです」

「まず基礎体力だな。家の周りを20周」

「お兄ちゃんお兄ちゃん、そういえばだけどさ、お兄ちゃんが鞭で叩いたら死んじやうんじやない?」

俺のレベルがかなり高いこと忘れてた……。危うくみんなを殺す所だった。

「目標時間23分。よーい」

「どーん」

小町のどーん、で空中に光魔導が炸裂する。

「いきなり!?!」

「いやー、こういうの見てると楽しいねー」

なんて呑気な事言っている。だが……

「何言ってるんすか。陽乃さんとめぐりさんも走るんすよ?」

「えっ!?!」

「目標時間18分! よーい」

「どーん」

再び光魔導が炸裂する。

「あ、御二人は鞭ありつすよ」

「ひーどーいー!」

そして陽乃さんとめぐり先輩は走りだした。

「歌うわ」

「え、何急に」

「♪」

なんか魔力が消費されていく感じがする。

「♪」

その消費がなんとなくだが気持ちいい。

“歌魔法を取得しました”

「くぶふっ!？」

歌魔法で……。まんまかよ……。

「何故空色デーズ？」

「あ？なんとなく……。…というか、なんでお前ら立ち止まってんの？」

「い、いや、聞き惚れてたっというか……」

ああ、歌魔法は魅了だったっけか。使い所ないな。魔導なら支援も探知も攻撃もできて便利なんだが

それより……。罰ゲーム何にすっかなあ。

罰ゲームしたいなあ。

「早く終わらせないと罰ゲームだぞ？お前ら」

「「「「「いつてきます!!」「」」」」」

「おにーちゃん、なんか歌ってよー」

急に言われてもな……。さっきはたまたま思いついただけだし……。

「月○花で！」

「♪」

体が冷えていくような暖かくなっていくような感覚。意味わからん。てか何？もう

魔導になったの？それともこういう仕様なの？

「○（骨）の欠片を集めて ○（肉）を飾り眠る

♪」

これ魔導になったら過去に戻れるとかないのかね。さすがに強すぎるか。ていうか小町、罰ゲームさせようとしてないか？

まあ、俺がやるわけじゃないしいいけど。

（そ、そそそそんなわけないよハハハハ）

「で、またか。罰ゲーム確定になるぞ？特に陽乃さんとめぐり先輩」

俺がそういうと2人は全力で、他はそれなりの速さで走り出した。体力持つのか、あれ。

「お兄ちゃん、さっき歌詞変えてなかった？」

「ハハハナニヲイツテイルノカワカラナイナ」

「んー、まあいいや。次L O n e l y F e a t h e rで！」

ウィツス

有無を言わさぬその言葉の強さに思わず頷いてしまった。アレ全部英語なんだよなあ。……だる。

「♪」

あれ？なんの感覚もない。ただ魔力が消費されていくだけ。何故だ……。まあいいか。

てか、口が回らねえ。英語はそれなりにできたはずなんだがな。

「〜♪」

「……」

やっぱりところどころ歌えない所あつたな。

この曲好きだから完璧にしたい。

(小町じやあそこまで歌えないよ)

んなことあねえよ。努力次第でどうにかなるだろ。

ふと、小町に袖を引つ張られる。

「15分経過したよ」

「陽乃さん、めぐり先輩、あと3分です」

一色、戸塚、材木座、川崎姉弟あと8分」

「うん、わかったよ」

「私5周しかしてないよー！」

全力で駆け出した。

「ああ！はるさん待ってくださいよ〜」

めぐり先輩はそれを追いかける。

「先輩、許してください」(*ゝゝ、ω・)

「あざとい。早く行け」

「はい」

一色も全力で走り出した。

はしるーころぶー血がーでーる……

(また懐かしいものを……)

うっせ。

「た、大志、行くよ!」

「え、ちよ、姉ちゃん!」

「我、もう疲れた……」

「罰ゲームは寝る前に家の周り10周な」

「ご、ごめんなさいいいい!」

ん、これでいい。

「やっぱりお兄ちゃんは鬼畜だね」

「うっせ」

結局、全員罰ゲームを受けることとなった。

6, 5話：アルテミアは彼に潰され、彼女は攫われる

たったこれだけの人数で魔王2人と勇者を倒すのは無理がある。

再び異世界召喚を行うしかない。しかし、今はまだ召喚するために必要な魔力が足りない。それに先輩勇者候補が強くなってからの方がいいかもしれない。

「あ、そうそう、お前にはもう異世界召喚はさせないよ。俺が殺すから。いや、殺したから」

いつの間にか、私の視界は自分の体を見上げていた。

私の首からは血が吹き出し、その上はなかった。

おかしいな。私、レベル320はあるのに……。

たかがナイフで首が落とされるなんて……。

そして、私の意識はなくなった。

「異世界召喚なんてしなれば、しようとしなければ良かったものを」

馬鹿だな。彼はそう吐き捨て消え去った。

「む、雪ノ下はカマクラを手懐けたか。まあ、1度会ってるしな」

カマクラは初代魔王、八幡の優秀なペットであった。だが、カマクラは初代勇者、小

町によって封印、転生させられた。もちろん、動物だったため、長い年月を経て八幡達の元へ戻ったのだ。

そして彼はもう一度カマクラと共に居たいと、召喚魔導にてここへ召喚した。もちろん、彼とカマクラは意思疎通ができる。でなければ雪ノ下を連れてテレポトなんてしない。

「どうかカマクラどこいったんだよ……」

カマクラは魔王城のどこかにはいるだろうが、まだ八幡達の所へは現れていなかった。

「ま、気長に待ってるか。ついでに海老名さんも連れてきて貰えば良かったかな。まあいいや、俺が攫ってこ」

監視スキルで廊下を見ながら気配を消し、歩く。

「ふむ、この部屋か。女子の部屋を覗くのは気が引けるが……」

よし、みんな寝てるな。

“無詠唱、詠唱破棄を取得しました”

それチート。

まあいいや。

テレポトで海老名さんの部屋に入る。そのまま魔法陣を展開し、この部屋の中身こ

とテレポートの準備をする。

「なんて説明しようかね。ま、その時になってからだな」

そういつ吹き、比企谷家(?)の空き部屋にテレポートした。

こんなことするなんてな。俺も堕ちたもんだな。いや、元から魔王だから元に戻っただけか? まあいい、寝よ。

再びテレポートを使い、自分の部屋に戻った。

あ、大賢者潰さないと。蘇生されたら困る。

たぶんもう遅いけど。

てかどこにしているのかわからねえけど。

王族を尋問して吐かなかつたら拷問するか。

また殺らなきゃいけないじゃねえか。

あと龍族と天魔族、できれば天族も味方につけたいところだな。

魔王城には6の龍帝がいるらしいが……。

今度戦ってみるか。

行間? (今までの後書きから+α) とステータス (現状)

ダーカライブ側

名前: ハチマン

種族: 魔王

L v. 386

HP : 80952

MP : 88834

称号: 初代魔王、蘇りし魔王、魔帝、月、闇、影の帝王

取得スキル: 闇, 影, 月, 死, 幻, 風魔導, 火, 水, 氷, 樹, 雷, 光, 土, 歌魔法, 召喚, 創造, 封印, 守護, 使役魔導, 魔導強化, 無詠唱, 詠唱破棄, 並列処理, 剣術, 威圧, テレポート, 吸撃, 虚偽の申告, 索敵, 鑑定, 監視, 忍び足, 本物を……、妹を想う気持ち、本当の友の為に……、以心伝心

名前: コマチ

種族: 人間(?)

L v. 377

HP : 79548

MP : 88795

称号：初代勇者、蘇りし勇者、陽、光、聖の使徒、

取得スキル：陽、聖、光、星、風、雷魔導、火、水、氷、土、月魔法、封印、守護魔導、無詠唱、並列処理、剣術、剣術強化、魔導強化、二刀流、テレポート、虚偽の申告、索敵、鑑定、兄を想う気持ち、以心伝心

名前：雪ノ下雪乃

種族：異世界人（以下略）

Lv. 19

HP : 786

MP : 1987

称号：氷の使徒、猫をモフリし者

取得スキル：水、雷、土、光魔法、氷、聖魔導、封印魔導、使役魔術、魔法強化、使役強化（猫型に対して）料理、裁縫、乗馬、本物を……、以心伝心

名前：一色いろは

種族：異世界人（?）

Lv. 10

HP : 1 2 3 0

MP : 9 6 5

称号 : 小悪魔

取得スキル : 火, 水, 雷魔法, 光, 闇, 幻魔術, 封印魔導, 素敵, 使役魔法 (♂, 男のみ)、使役強化 (♂, 男に対して)、吸撃、料理、本物を……

名前 : 戸塚彩加

L v. 1 1

HP : 1 0 0 2

MP : 8 6 9

称号 : 天使

取得スキル : 光魔法、治癒魔導、支援魔法、封印魔導、素敵、広域化、本当の友のた
めに……、以心伝心

名前 : 材木座義輝

L v. 1 4

HP : 1 5 9 9

MP : 7 0 8

称号 : 自称剣豪將軍

心

取得スキル：闇魔術、剣術、剣術強化（小）、封印魔導、本当の友の為に……、以心伝

名前：川崎沙希

Lv. 12

HP：1507

MP：897

称号：ブラコン

取得スキル：拳術、付与魔法、封印魔導、火魔法、索敵、料理、裁縫、弟を思う気持

ち

名前：川崎大志

Lv. 14

HP：1600

MP：963

称号：シスコン

取得スキル：剣術、盾術、火魔法、光魔術、姉の力に！

名前：海老名姫菜

種族：異世界人（？）

Lv. 11

HP : 892

MP : 1121

称号 : 腐女子

取得スキル : 腐, 闇魔術, 封印魔導, 限定テレポート

名前 : 雪ノ下陽乃

種族 : 魔王

Lv. 333

HP : 77521

MP : 85429

称号 : 3代目魔王, 使役の達人, 拗れたシスコ

取得スキル : 火, 水, 氷, 樹, 花, 風, 闇, 使役, 支援, 治癒, 封印魔導, 月, 光魔法, 無詠唱, 並列処理, 剣術, 魔導強化, 剣術強化, 合気道, 索敵, 乗馬, 虚偽の申告, 妹を想う気持ち?, つまらないな……, 本物なんてあるのかな?, 以心伝心

名前 : 城廻めぐり

種族 : 人間 (勇者)

Lv 298

HP : 7 4 2 5 6

MP : 1 0 1 1 4 2

称号 : 癒し系美少女、3代目勇者PT

取得スキル : 治癒、光、陽、雷、風、花、守護、支援、封印魔導、月、星、火、水魔
法、並列処理、魔導強化、広域化、索敵

名前 : カマクラ

種族 : 猫型魔獣ラーヴ

Lv. 216

HP : 2 0 5 9 6

MP : 7 5 6 2 1

称号 : 名前持ち、初代魔王のペット

取得スキル : 支援、回復、時、空間魔法、限定レポート、魔王の血

王国側

※(死)は死んでいるってことで。

名前 : アルテミシア(死)

種族 : 人間

Lv. 321

HP : 59213

MP : 126544

称号 : 召喚士、賢者、王妃

取得スキル : 水, 氷, 樹, 光, 雷, 聖, 召喚, 支援, 治癒, 守護魔導, 火, 風, 月, 星,
陽魔法、無詠唱、詠唱破棄、並列処理、魔導強化、テレポルト、索敵、広域化

名前 : ユリアス (死)

種族 : 人間

Lv. 333

HP : 97522

MP : 38991

称号 : 劍豪、剛腕、王

取得スキル : 劍術、槍術、拳術、槌術、盾術、劍術強化、槍術強化、槌術強化、拳術
強化、支援、守護魔導、索敵、二刀流、二槍流、二槌流、剛腕

名前 : ムーヴア

種族 : 人間

Lv. 300

HP : 79669

MP : 80562

称号：劍聖、竜殺し、騎士長

取得スキル：火，水，氷，風，樹，雷，光，聖，陽，守護，支援，付与魔導、劍術、劍術強化、二刀流、テレポート

王国側総武高校組、レベル、HP、MP以外変化なし

ネピア

目の前にあつたティツシユ箱から

この世界の名前

メモリア

そのとなりにあつたカードの名前から

人間側の国名

ダーカライブ

魔王や魔族、魔物達が住まう地。

ダークと目の前にあつたデートアライブのアライブから

ユリアス

目の前で友達がシャドバやってたから

アルテミシア

デートアライブから、名前だけ

比企谷八幡

ダーカライブ城の初代主

この世界で小町が妹じゃないということに気付いているが、今まで過ごしてきた中で妹としてしかみれない。

猫型魔獣ラーブ

俺ガイルの“ラーブ”とデアラの“”

カマクラ似の猫。

初代魔王八幡のペット。契約を交わし、八幡の血が流れている。そのため、封印魔導で転生させられた。

比企谷小町

初代勇者。この世界では兄弟姉妹はいない。

八幡がこの世界では兄ではないことを知り、八幡に秘密で自身も嫁候補に入った。

現ダーカライブ城の主

雪ノ下陽乃

もともとこの世界では3代目魔王だった。

この世界に呼ばれた翌日にダーカライブ城へ行き、めぐりと共に前魔王を討伐し、復活した（11代目）魔王となった。そしてめぐり先輩とともに封印の間を花畑にした。

城廻めぐり

3代目勇者のパーティーメンバー。

この世界に転生してからは陽乃さんと共に前魔王を討伐した。

魔導

完全に、イメージ通りに属性を操ることができる。その場合、詠唱は必須。

魔法

詠唱は固定、イメージ通りにはいかないがそれなりに属性を操ることができる。

魔術

詠唱は固定。簡単な属性を操ることができる。

無詠唱

魔導や魔法の詠唱を頭の中で唱えることができる。

詠唱破棄

魔導や魔法の詠唱を唱えなくてもイメージだけで魔導や魔法を使うことができる。

並列処理

魔導や魔法の複数同時使用ができる。

月魔導

月の力で攻撃したり体力や魔力を回復する。

吸撃

相手の魔力を吸収してその半分を自分の魔力や体力に変換する。

陽魔導

太陽の力で攻撃したりエンハンスをかける。

星魔導

星の力で攻撃する。ものすごく小さな星を作り出し、それを使って攻撃する。また、

魔力を回復する。自分以外の全ての状態異常を治す。

影魔導

影を操る魔法。

死魔導

死を操る魔法。

虚偽の申告

見た目や自分に関係することを変える。

本物を……

相手の本当の姿を見破る。

本物と信じる者がいる限り、使用者？と対象のステータスがかなり上昇する。

封印魔導

魔王と勇者、勇者候補しか使えず、敵対関係にある者、またはその血が流れている者同士でしか使えない。また、お互いが消耗している時にしか使えず、距離が20m以上離れていることが発動の条件。(ポケモンで言う体力が赤になつてるとき)

記憶や能力、その他もろもろを封印し、異世界へ転生させる。赤ちゃんからやり直し。この世界の召喚魔導の対象になると記憶や能力、その他もろもろが蘇る。

召喚魔導

八幡のそれは世界の神話の妖怪、化け物を召喚できる。神は召喚できない。というやりしたら勇者じゃ勝てなくなる。

鑑定

相手のステータスを見ることができ。隠蔽で防げる

兄の為に……

兄についていくことを決めた証。兄の為を想っている限りは兄と弟妹のステータスがかなり上がる。

妹を想う気持ち

妹を愛する証。つまりはシスコンの証。

なお、この世界で八幡と小町が兄妹なのかは不明。

以心伝心

本物を……、妹を想う気持ち、兄の為に……、本当の友の為に……を取得していないと取得できない。

伝わらないように意識していないと自分が考えていることが筒抜けになる。

支援魔法

エンハンス、強化魔法

腐魔術

文字通り腐らせる。

魔術の時は草、花、小さい物のみ、魔法になると人一人分の大ききくくらいの物までを、魔導になると自分より弱い者までを腐らせることができる。支援されると物はなんでも、者は自分くらいまで腐らせることができる。

限定テレポート

本当に頼れる者の隣へテレポートする。

本当の友の為に……

本当の友がいる限り（ここでは戸塚と材木座と八幡）、信じていられる限り、3人のステータスがかなり上がる。

監視

1 度視認した場所すべてを視ることが出来る。しかし、視界が交わるため、真つ暗な所での使用を推奨する。

妹を想う気持ち？

拗れた気持ち。ステータスは本来の 2 / 3 ほどだけ上がる。しかし、陽乃さんの場合は一方的。

つまらないな……

対峙している相手がつまらない相手だとステータスが最低 1，2.5 倍、最大 2，5 倍になる。

本物なんてあるのかな？

以心伝心を持たず、本物を求めて……を取得している相手と対峙すると、ステータスが 1，5 倍になる。

(今のところ由比ヶ浜キラ)

花魔導

花を咲かせる。また花と会話ができるようになる。

広域化

回復系の魔導、魔法、魔術を使うと自分の味方全員の体力が回復する。

歌魔法

歌で相手を魅了したり、味方を援護したりできる。

魔導になると歌詞だけでなく、それに近い、もしくは関連しているイメージがそのまま魔法として表れる。

時魔法

時を超えて動くことができる。

消費魔力によつては過去に戻れたり未来に行けたりできる。

空間魔法

テレポートの上位互換。空間を破り、穴を開け、そこから出入りできる。攻撃魔法と

しても使用可能。

弟を想う気持ち

妹を想う気持ちと同じ

姉の力に!

兄の為に……のちよつと強化版

兄を想う気持ち

兄の為に……の超強化版

魔王の血

その魔王が近くにいる時、ステータスがかなりあがる。

7話：彼女達と彼等は再開する

7話：彼女達と彼等は再開する

「あれ？見たことない天井……？」

朝目が覚めると、見た事のある部屋の配置なのにどこか広く感じ、更にみたことのない天井と壁、ベッドは昨日までよりかなりふかふかだった。

「んん？」

やっぱりおかしい。私が居た部屋はこんなに民家っぽくなかったはずだ。でもお城の部屋より広い……？

ふと、ノックが響く。

お城ではノックする人なんていなかった。というより優美子の部屋に入り浸ってノックされる機会なんてなかった。

誰か分からないけど、とりあえず魔法の準備を……。

あ、私の魔法使えないじゃん。ここ草とかないし。そもそも人に使えないし。

「どうぞ」

「失礼する」

「ひ、ひひヒキタニ君!？」

入ってきたのはなんと比企谷君だった。なんで……？

「比企谷だ。悪いが、訳ありというわけでもないがあんたの魔法と種族に興味があつて攫わせて貰った。もちろんここでの生活は保証しよう」

今までにない上から目線の態度。そしてそこから発せられる威圧感に、私は屈してしまつた。

「うん、わかつたよ比企谷君」

「ん、朝飯できてるから準備とか終わつたら下りてきてくれ。寝癖とか酷いぞ」

なっ!? それは気付いても言っちゃいけないやつ!

声をかけようとした時にはもう遅く、比企谷君は部屋を出て行つた。

「はあ」

私は1つため息をつき、ベッドからでて、いつの間にか設置されていた鏡の前に立ち、手ぐしで髪を直していく。

「こつちの方が息苦しくなくていいかも。限定テレポト先も比企谷君の隣に変えてお
ハ」

どうしてこうなつたんだろ……。

でも、なんとなく楽しみ、かも。

海老名さんが起きて数分後、うとうととしていた彼は再びベッドに入り眠りこけていた。

《ニヤア》

猫の鳴き声とともに俺の腹に柔らかな衝撃が走る。

「まだ寝かせろよ……」

俺はそう言つて壁側へ寝返りをうつた。

《ミヤツ》

さつきより強く柔らかい衝撃が脇腹に走る。

意外と痛い。

ん？猫の鳴き声？

俺はバツと起き上がり猫の鳴き声がした方へ向く。

「カマクラ!?どこ行つてたんだよ」

《……ミヤア》

なんとなく疲れているカマクラと、背中ですやすやと安心した表情で寝ている雪ノ下に、カマクラに何があつたのか察した。

「ああ、雪ノ下にモフられてたのか。お気の毒に」

俺はこんな時でもモフる雪ノ下に呆れる。

「とりあえず空き部屋にでも突っ込んで、カマクラ」

《ニヤウ》

カマクラは短く鳴くと、空間魔法で穴を開け、消えていった。

「どう説明したもんかね……」

独り呟いて、俺は瞼を閉じた。

そして、そのまま意識を手放した。

「……………おはよ」

「おはようお兄ちゃん！」

「おはようございます、先輩！」

「おはよ、八幡」

「うむ、おはようだ、八幡！」

「おはようございます、お兄さん！」

お兄さんと聞いてなんかイラツとした八幡。微量ではあるか、魔力が漏れ出ている。

「おはよう、比企谷」

「……おはよう、比企谷君」

《ミヤウ》

「なんで朝から勢揃い……………」

「小町ちゃん、なんであんなに不機嫌なの？」

「お兄ちゃんは朝に弱いですから……。朝だけはシスコンでもないですよ……」

八幡は小町が遠い目をしてることに気づいたが、何も言わずに放置した。

「比企谷君、大丈夫？」

「ん」

陽乃が話しかけても八幡は素つ気なく返し、リビングを出て外に出た。

八幡が出ていった後、陽乃は八幡が素つ気なすぎたせいか、どことなく落ち込んで

いる。

「八幡なんか元気なかったね」

「お兄ちゃんは朝だけはそんな感じですよ。正確には寝起きですけど」

この世界でもそうだとは思いませんでしたけどね、と付け足す小町。

「そうなんだ〜」

「で、なんで雪乃さんと海老名さんがここに？」

「あ、それ私も気になりましたー！」

「『今更!』」

実は小町というはも朝が弱かったりする。八幡程ではないにしろ、特に衝撃的なことがない限りは何も言わなかったり気付かなかったりする。

「私はあの猫に……」

「ああ、お兄ちゃんのカマクラですか。よく手懐けられましたね。確かレベルが200はあつた気がするんですけど」

「ひ、比企谷君のだったの……」

カマクラは主である八幡の命令がない時は基本的に大人しく、悪意や敵意を持たずに近づく者には普通に懐く。善意や好意100%で来るのであれば、来る者拒まずという感じだ。

「ええ。小町が封印魔導で飛んじやったんですけどね」

「あれ？封印魔導って魔王とかにしか効かないんじゃないの？」

「カマクラはお兄ちゃんの血が多く流れてますから誤作動を起こしたんだと思います」

話題になっているカマクラはリビングのテーブルの下で丸くなっている。主に似て怠惰な性格である。

「で、海老名さんは何故？」

「攫われた」

……？

「この場にいる全員が？を頭の上に浮かべている。

「えっ……と、どういうことかな？」

「比企谷君が私の種族と腐魔術に興味があつたらしいです」

「あー、昨日の夜小町と2人になってお兄ちゃんのこと色々聞いた時にお兄ちゃんは興味持った者はよく攫うって言つてましたね……」

八幡はその場にいないが、小町が言つたその言葉にみんなに呆れられた。

そのころ、八幡は……

「雨降る朝に燃え盛る水は落ち、雷纏いし風は山を覆う」

彼は犯罪者集団の拠点である山で新たに習得した独自魔導のテストをしていた。その山にいた犯罪者の大半が既に殺されていた。その山の動植物もほとんどが焼け、あたり一面が赤やオレンジ、青い炎で埋め尽くされていた。逃げようとした犯罪者達は山から降りた所にある風と雷のドームに触れた瞬間、身体が切り刻まれ、強い電気があたり撒き散らされた。

彼がテストと言つて使つたその魔導は、使い方次第ではその山自体を消し去る事が出来るほどの威力を持つた危険な魔導だ。とは言うものの、この世界に来てから八幡は殺人に抵抗がなくなり、犯罪者集団や『身内』に手を出した者達はその全員が殺される。

後に、彼はこう呼ばれることとなつた。

〃魔帝ハチマン〃

「独自魔導強すぎるだろ……」

風魔導で宙に浮いた彼は辺りの景色を見ながらそう呟いた。

「はあ、やりすぎだな。とりあえず消火だな」

彼は右手を振り、この山全域に雨を降らせる。雨とは言っても雲からではなく、彼の周りから、だが。その際に燃え盛っていた炎と水、風と雷のドームは消えた。

「あー、帰ろ……」

彼は宙に浮いたままその場から消えた。運良く逃げることできた数人の犯罪者はメモリア王国に顔を真つ青にして駆け込むが指名手配されていたため、すぐに捕まった。その際、魔王に襲われたと言うが、憲兵は聞く耳を持たず、問答無用で城の地下にある檻に入れた。

8話：彼は恐怖の対象となった 8, 5話：魔法の練習

（闇）

8話：何故か彼女等はバンドを結成しようとする

「という訳で、バンドを結成したいと思えます！」

「どういう訳だよ!？」

八幡が雪乃や姫菜を攫ってちょうど2週間たった。

その間、八幡は朝起きては王国側へちよつかいを出したり犯罪者集団を皆殺しにしたりと（特にストレスが溜まっている訳では無いが）八つ当たり感覚で遊びに行っていた。帰ってきた後は歌を歌っていたのでそれに感化された小町、陽乃、いろはが3人で（ここ重要）話し合い、急なバンド結成に至ったのだ。

「まあいいじゃん」

実はこの3人も歌魔法を習得し、新しくなった封印の間で歌っていたのだ。

「だ・か・らあ、比企谷君、キーボードとドラムとギターとベースとマイク創って？」

「壁は火と水を纏い、風が吹く」

陽乃のあざとい仕草にちよつとイラツとしてしまった八幡は独自魔導によって陽乃

をサウナ状態の守護壁の中に閉じ込めた。

「ちよつ!?ここからだして!?!暑いよ!?!」

(そりやサウナなんで)

(鬼畜だ、このお兄ちゃん。いや、鬼いちゃん)

以心伝心により小町の考えていることが伝わってしまい……。

八幡は右手を一振り、小町も陽乃と同じような壁の中に閉じ込めた。実は守護魔導は外からの攻撃からはちゃんとダメーヂが通るが、内側からの攻撃はなかなか通じないのだ。外からの攻撃を100とすると、内側からの攻撃は2から5なのだ。しかも、八幡が造った壁はドーム状の真ん中に向けて暖かい(熱い)微風が吹いている。この熱が中から壁を壊そうとする者の体力や水分を奪っていく。

八幡は何がしたいのかと言うと、恐怖支配だ。明らかに家族……身内に対して使うものではない。恐怖支配は言い過ぎにしても、ほんのちよつとした八つ当たりなのだ。

「比企谷君、姉さんはまだしも、小町さんは解放してあげたら?いつもお世話になってるのだし」

「ちよ!雪乃ちゃん!それどういうk「それもそうだな。悪いな小町」……」

八幡は陽乃の言葉を遮ると、左手を振り、小町を覆っていた壁を消した。

「う、うん」

「陽乃さん」

「は、はい」

「創造魔導は便利なものではないんです。見た目をイメージできるからといって中身の構造が分からなければ意味がないんです。せめて俺が手に触れないと創れません」

「はい。すみませんでした」

（初めてこんな姉さんを見たわ……）

雪乃は陽乃が心から反省している様子を初めて見たため、新鮮に感じている。もちろん、雪乃だけでなく、陽乃をよく知るめぐりもいろはもそう感じている。

「ギターなら地下の倉庫にありますから」

そう言つて左手を振り、陽乃を解放しながらリビングをでた。

なお、サウナの壁の被害に合わなかったカマクラを含む8人と1匹は、八幡に考えていることが伝わらないよう、心を閉じていた。

八幡が出ていった後のリビングは倒れかけた陽乃を介抱するために慌ただしかったそう。

リビングを出た八幡は、スマホとマイク、ベースにドラムを創っていたそう。さすがにキーボードは触ったことが無かったため創れなかったようだ。

次の日の朝、リビングに置いてあったスタンドマイク、ベース、ドラムに陽乃、小町、

いろはが涙を浮かべて八幡の部屋に突撃した。が、寝起きの機嫌が悪い八幡に、朝の日課（犯罪者集団潰し、王国側へのちよっかい）が終わり、帰ってくるまで八幡の部屋で3人がサウナの壁に閉じ込められていた。帰ってきた時、泣き喚いて土下座をして許しを乞うたという。

その後、八幡がお手洗いに行っている間に八幡以外の全員が「八幡には手を出さず、怒らせず」という意見が一致した。

8, 5話：魔法の練習（闇）

さらに1週間が経過し、地球組と(?)組のレベルが30前後になった。

「八幡！我に闇魔導を教えてくださいませ！」

上から目線で頼んできた材木座に、俺は無言で暗闇をプレゼントした。人に頼む時は頼み方つてもんがあるだろう、と言って暗闇に包まれた材木座を放置して海老名と一色に闇系統の使い方を教えた。その時、材木座の近くで教えていたからうるさかった。一色にうるさいです、と言われると黙ったが。

「闇系統は基本的に他の魔法と組み合わせ使おうんだが、今の材木座のように相手に闇を与える事もできる。頭の中で相手に闇をまわりつかせるイメージをしてくれ。詠唱は「深き闇を与えよ」だ。俺には効かんから材木座にやってみてくれ」

「は、八幡!？」

俺は材木座にまわりついていていた闇を消し、材木座に闇を与えるよう、指示する。

「あ、そうそう、どんな時も冷静に対処しろよ。特に材木座」

海老名も一色も反応は無かった。魔法のイメージに集中しているのだろう。だからこそ、危ない。

「材木座はできるか？」

「ふつ、我を誰だと思っている。剣豪將軍であるぞ！」

「いや、剣豪將軍なら魔法使わねえだろ……」

俺が呆れ返っていると、ふと目の前が暗くなった。

闇魔法だ。

「やるな、材木座。無詠唱もできてるじゃないか」

ただ、と振り返ると

「俺の目の前だけじゃ効果はない。ちゃんとまわりつかせない」と

30分後、3人ともまわりつかせることはできたが、お互いに足止め程度にしかならず、後日もう1度練習することになったのはまた違う話。

9話：何事にも、対価というものは必要である

9話：何事にも、対価というものは必要である。

あれから半年。魔王城ではなにもなく、何事もない日が続いていた。反乱を起こす魔物達はもちろん、魔獣、魔人も事件を起こすことなく、魔王会議で作られた法律の元、平和に暮らしていた。

だが、そんな魔界の魔王城下、アスタに異物が入り込んできた。『人間』だ。彼女は武器を持つことなく、突如としてこのアスタに迷い込んだ。それを目敏く見つけたアスタの問番、蛇を使役することで有名なリーア種のスネイは、即時拘束、魔王城へと運び込まれた。

それだけなら、良かったのだ。良かったのだが、ここでは終わらなかつた。彼女は俺が知っていた少女。鶴見留美だった。中学生となつた彼女は、クリスマスイベントに会つた時よりも少し背が伸びていた。だが、纏う雰囲気は全く変わらず、クールであつた。

そうではない。問題はそこではない。何故彼女がこの世界にいるのか、が問題である。恐らくではあるが、数ヶ月掛けて復活魔法を使って生き返つたメモリアの女王が、

再び召喚魔導を使ったのだろう。でなければ彼女がこんなところにいるわけがない。

やはり、メモリアの女王……アルテミスシアは肉片も残さず消し飛ばした方が良かったのではないだろうか……。まあ、今更後悔してももう遅い。これ以上の被害者を出さないためにも、今すぐにでも消し炭にしてきた方がいいだろう。

「陽乃さん、留美を頼みます」

一言、そう残して俺はメモリア王城正門前に転移した。

雪乃ちゃんを始め、姫菜までいなくなつた。部屋の中ごと無くなつていたからか、優美子は王国側の何かかと、王様に突つかかつていった。俺達はそんな優美子に青ざめてしまつたが、王様は逆に驚き、すぐ様女王と共に姫菜のいた部屋へと入つた。

その一言目に、俺は殺気を覚えた。

「これは私を殺した者と同じ魔力……」

それはつまり、姫菜を連れ去つたのは比企谷ということになる。恐らく、雪乃ちゃんも猫で比企谷が釣つたのだろう。

許せない。俺のモノは絶対に取り返す……。

さて、ここに来たはいいが、門番弱すぎだろ……。

なんだよ、Lv50って。そこらへんの魔物でも倒せるんじゃないやねえの？

そんなことはさておき、その門番のおかげで楽に城内に侵入できた。もちろん、そんなことをせずとも破壊すれば良いだけなのだが、そんなことをすれば全人類が束になつて宣戦布告されそうな気がする。正直、あの門番レベルが攻め込んでくるなら問題ないが、統率もままならない今の魔界に賢者が攻め込まれると負けはせずともかなりの魔族、魔人が殺されてしまうかもしれない。

統一されてない魔界に守るべき者。俺と陽乃さん、小町や五龍帝だけでは城と城下町を守るのが精一杯なのだ。

ならば全人類を消し去ればいい、という訳でもない。罪もない人を殺すのは酷なものだ。

ならば、いかに王国城内部の人間のしわざに見せかけられるか、である。しかし、それも現実的ではない。よほどのことがない限りはレベル差の問題で殺すことができない。俺の見てきた中では王と賢者のみ。葉山たちはまだレベルが低く、洗脳しても返り討ちにされるだけ。

が、賢者の居場所が分からない。どんな人かすらも分からない。これでは殺したところで蘇生させられて終わってしまい、なんの意味もない。

あ、結界で閉じ込めるか。

「……めんどくせえ」

このクソでかい城を覆う結界を作るために風魔導で空に舞い、地道に魔力を練る。その時であった。

突如、地上から膨大な魔力の塊が飛んできた。属性は、無い。無属性だ。そして、この城の王でも女王でもない魔力。なら……

「お前が賢者か……」

「そうね……たしかに私が賢者と呼ばれているわ。プラトルよ」

黒く長い、艶やかな髪質、パツチリと開いた目には蒼い瞳。桜色の唇。ほどよい胸に全体的にバランスのとれた体型。いわゆる美女であった。まあ、陽乃さんほどではないと断言できるが。……たぶん。ちよつと蒼い瞳に惹かれてたり惹かれてなかったり。

ステータス展開……

名前：プラトル

種族：大賢者

L v. 452

HP : 90020

MP : 164300

称号：初代賢者、永遠を歩きし者、永遠の独身、ドM、???

取得スキル：独自魔導、完全蘇生魔導、召喚魔導、帰還魔導、支援魔導、時魔導（自身にのみ有効、非戦闘時）、未来予知（5秒先まで）、索敵、暗殺耐性（常時）、魔導威力倍化（戦闘時）、魔導効果倍化（戦闘時）、魔導範囲強化（戦闘時）、魔導攻撃耐性（常時、特大）、全属性耐性（常時、特大）、物理攻撃弱化（常時、特大）、物理耐性弱化（常時、特大）、HP倍化（非戦闘時）、MP自動回復（常時、特大）、HP自動回復（常時、特大）、サクリファイズ（戦闘時常に有効、HP↓MP、性欲／嗅覚、味覚↓聴覚、視覚、性欲／色覚↓MP、HP、性欲）、薬耐性弱化（常時、特大）、高速思考、無詠唱、詠唱破棄、魔力操作、威圧、取得exp3倍、性欲30倍（常時）、媚薬効果40倍（常時）、妊娠不可

コイツ良い意味でも悪い意味でも頭逝かれてんだろ。や、物理耐性弱化あるだけいいけどさ。性欲30倍ってなんだよ、なんでサクリファイズで性欲にも効果あるんだよ……。てか何歳だよ。あと独身で……平塚先生かよ……。そういえば先生どこいったんだろ……。

「魔帝ハチマン」

「へえ……貴方が……ねえ、私と契約してくれない？」

「は？」

「私が悪魔に転生して貴方の味方になるかわりに私の性欲を解消して？」

「……は？」

ちよつと迷つてしまったことは俺だけの秘密として、前半部分はかなり魅力的だ。俺よりもさらにレベルが高く、それも賢者が味方についてくれるのはありがたい。が……「信用できないな」

「じゃあどうしてくれれば信用してくれる？もう性欲を溜め込むのも辛いだよ」

「ただだけ性欲溜まつてんだよ……そのへんの人襲えよ……」

「男は私を見ると逃げ去るのよ！それに、私の色眼鏡に叶う人はほとんどが私の性欲に耐えられずに干からびちゃうし」

「それもはやサキユバス……。ていうか、犯罪者でも襲つとけよ。牢にかなりいるはずだろ」

「いやよ、あんな人間のゴミなんて。牢の前を通るのもいやなのに」

ま、そりやそうだ。俺だつて嫌だし。

「契約を使えば信用できるかしら？私からは性欲の解消、貴方からは貴方の得になること、でどうかしら？」

「俺に多大なメリットがあつたとしても、それは俺だけの判断じゃ、決められないな」

10話：敵には力加減を。味方とは会議を。

10話：敵には力加減を、味方とは会議を。

「契約を使えば信用できるかしら？ 私からは性欲の解消、貴方からは貴方の得になること、でどうかしら？」

「俺に多大なメリットがあつたとしても、それは俺だけの判断じゃ、決められないな」

五天龍という幹部がいる。それだけでも俺の独断で決める訳にはいかない。そして、今は大切な人達がいる。

人間側にいた賢者を独断連れてきて、後で裏切られたとなつては俺はどうしようもなく後悔するし、復讐を果たしたくなるだろう。

「じゃあ、一週間後、再びここで会いましょう？ 私はいつまでもは待てないけど、それくらいなら待つわ」

「そうか。なら、なるべく早めに返答をもつてこよう」

それを聞くと、プラトルは笑顔で転移していった。

その笑顔に見蕩れてはいない。うん、きつと、たぶん、おそらく。

ふと、地上から複数の魔力を感知した。下を向くと、葉山を筆頭に三浦や相模、童貞風見鶏らが自分の手に魔力を貯めていた。

しかし、魔力込めるのが遅く、質も悪く、密度も悪い。これなら回避なんてしなくてもダメージなんてほとんどない。唯一、戸部は密度はいい。頑張ればかなり、葉山なんか目じやないほどに強くなるだろう。

「今だ！撃て！」

葉山の声と共に数十の属性魔力弾が放たれる。

が、戸部と葉山のそれ以外は十数メートルで霧散した。質と密度が悪いせいだ。

そして、葉山のそれも俺に届く直前で霧散した。よって、俺が対処するのは戸部のそれだけとなった。深紅に輝く魔力弾は熱を感じさせる。

俺は天然水（いろはすじやない）のように透明な水を纏い、それを斬る。

勇者はポカンとこちらを見ていたが、俺が地面に降り立つとともに各々の武器を手には、こちらへ駆けてきた。

「死なないように手加減するか……」

「はあああああ！」

葉山は片手剣を大振りに振り下ろす。槍使い以外は全く同じ動作をする。

こいつらは馬鹿なのだろうか。こんな人間と同じ大きさの敵を相手取るなら1対2か3程度で囲むのが1番とは言えないかもしれないが得策だ。

そんなところを逃す俺ではない。翼も使い数メートル跳ぶ。それだけで同士討ち。特に葉山の剣は聖剣のため、目の前にいた名前も知らぬクラスメイトに直撃した。

「なっ！」

「うがあああ！」

そして、そこに追撃とばかりに魔力弾が降ってくる。

いや、なんでだよ……。普通俺が回避した所を撃つんじゃないのか。

もちろん、1発は俺の方に来た。戸部だ。

こいつらと比べるとかなり上手いし、アホでも馬鹿でもない。少し見直した。それが海老名さんを取り戻すための努力なのかは分からないが、うちに欲しいところだ。

が、まだまだだ。エメラルドに輝くそれを弾き返した。

「ヒキタニイイ！」

あの集団を飛び越え剣を向けたのは葉山だった。立ち向かってくるのは評価するが、遅い、動作がバレバレだ。

俺は斜め前に1歩踏み込み手刀を聖剣の横に振り抜いた。某アニメのキ〇トさんのように、綺麗に武器破壊はできないが、力でゴリ押し、叩き落とす。その際、地面に深

く食いこんだが知ったことではない。

そして、その勢いのまま回転し、葉山の首に軽く手を当てた。葉山は気を失い、地面に倒れた。

うむ、上手く加減できたかなつと。

「そのの、まだ戦うか？」

戦意喪失しているだろうが、一応聞く。大半が俯き、回復魔法が使える者は城内部から駆けてくる。

それを一瞥し、嫌がらせとして聖剣をより深く食い込ませてから転移した。

「たでーま」

玄関から入らず、ふとりピングに現れたのは八幡。

直接転移した方が楽とはいえ、急に現れれば驚くというもの。特に、女性陣が談笑していたなら尚更。

「きやあああああ！」

「ぬおおおおお!!」

女性陣はまだ慣れてないのか、急に現れたことに驚き、材木座はそんな女性陣の叫び声に驚いた。戸塚はニコニコしており、あまり疲れてない八幡だったが、かなり癒され

た。

「おかえり、八幡」

「おう」

「ちよつと！急に転移してこないでよ！ただえさえお兄ちゃんの転移は空間の揺らぎがないんだから！」

小町の嘆きは他の女性陣の心を代弁したかのよう。

「おう、すまんすまん。それより緊急会議だ」

「了解」

小町、めぐり、陽乃は八幡のその言葉に目の色を変え、真剣な口調で答えた。

それを聞くと、八幡はすぐに会議室に転移し、隣の放送室にて、幹部及び五天龍の招集を行った。

数分後、円卓には12人が座った。

「さて、今回集まって貰ったのは今朝、この城に來た留美のことと、人間側にいる賢者のことだ。まずは留美のこと」

「留美ちゃんは、私たちが封印魔導を受けて転生した世界の住人だよ」

「して、それがどうかしたのかね、八幡よ」

陽乃の言葉に答えたのは砲天龍メギドラ。五天龍で唯一翼を持たない。しかし、身体

には多数の砲台があり、単純な火力だけならトップに立つ。

「留美ちゃん、だったかしら、その子は普通の人間。なのに、ここにいる。つまりは人間が召喚魔導を使ったとみられる、それくらい誰にも分かるわよね、その子が何故人間側ではなく、ここにいいのか、ということよね」

蒼天龍ティアマト。海と蒼空を司り、尚且つ蒼炎を操る力をもつ。その殲滅力は計り知れず、八幡でさえその殲滅力には敵わないだろう。

尚、年齢を聞くと殲滅力にもいわせたブレスや魔導を放ってくるので注意が必要。

八幡が初代だったころ、それを聞いてしまい、八幡がいた、当時統治していた、人間領にほど近い魔族領にて喧嘩（？）が勃発。それは人間側にも飛び火。人間側も魔族側も小国が2、3ほど滅んだ。それが原因で八幡は魔王と呼ばれ、人間側との対立、幾千年も続く戦争の始まりとも言われている。

「そういうことだ。そして留美の処遇をどうするか、でもある」

「まだ、幼い。そなた、任せる」

光天龍エールクレル。光や闇を自在に操り、喧嘩をふっかけてきた者の光を幾度も失わせてきた龍だ。

かく言うエールクレルもまだ幼く、まだ百数年しか生きていない。

まあ、人間よりかは長く生きているが。

「我也貴様に任せようぞ」

次天龍ディール。時や空間を司る最強クラスの龍だ。彼に傷を負わせたものは後にも先にも八幡だけ。とはいえ、その傷も一瞬もせずに戻ってしまったが。

「私は興味がない」

死天龍エルドラド。世界最凶のドラゴン。生死を司り、数々の動植物を死に導き、エルドラドが住んでいた場所にはほとんど何も無かったという。

「それより八幡の血をくれ」

吸血鬼の女王にして幹部の一人、セロ・ツェルン。血を吸った者の能力をコピーし、昇華させる。

「……」

デュラハン、トーマス・ガールド。人間界最強の騎士王だったが、数々の国に恐れられ、自分の国に裏切られ首を落とされた。

「zzzz」

眠っているのは自由神スノーローズ。あっちへフラフラこっちへフラフラと、とにかく自由に動く。一時期は人間側にいた事もあった。

正直、幹部にしておくには怖いが、何故か情報を誰かに渡すということとはしないのだ。「とりあえずこれはあとで私たちが事情を聞いてからだね。留美ちゃん、私たちにあつ

てからすぐに眠っちゃったし」

「それよりも賢者よ。あのアマ、次はどうしたの？人間側の男でも滅ぼした？」

「実は……………」

「実は……………」

「……………こつちにつくかわりに性欲処理を頼まれた」

瞬間、あたりは不気味なほどな静寂に包まれた。

は？とか、え？とか、ごめんもう一回言つて？とかではなく、完全な無言、静寂、沈

黙。外でさえ、静かになった。

まさに嵐の前の静けさ。

(耳塞いどん)

八幡が耳に両手を当てた瞬間

「はあああああああああ!?!」

普段喋らないトーマスやエルドラド、スノーローズまでもが叫んだ。